

## オンライン英会話学習によるスピーキング不安と意識の変容

小林 翔\*

(2020年10月21日受理)

### Changes in Anxiety and Attitude of Speaking in Online English Learning

Sho KOBAYASHI

キーワード: スカイプ, スピーキング, 不安, オンライン英会話, 共時的コミュニケーション

本稿は、英語専攻の1名を対象としたオンライン英会話学習を通じたスピーキング不安と自己肯定感に注目し、その成果を報告する。インタラクション仮説を参考に、複数のスピーキングタスクを含む総合的学習を考案し、英語母語話者との1対1のオンライン英会話学習に毎時間25分間取り組んでもらった。実施期間は1か月間であり、8回のオンライン英会話学習の取り組みが、どのように参加者のスピーキング不安と自己肯定感に影響を与えたかをインタビューの結果を質的に調査し、考察した。インタビューの分析結果から、一連のタスクを含むオンライン英会話学習を通してスピーキング不安を軽減し、自己肯定感が高まり、英語学習への肯定的影響が期待できることがわかった。さらに、短時間で少ない回数であっても実際にオンライン英会話を体験して即興的に英語で話す事に慣れる必要性や、回数を重ねるごとに体感できる自己効力感の改善が重要な鍵となることが示された。これらの結果をもとに、スピーキングに対する不安要因や、不安の軽減理由、不安の推移、自己効力感について考察する。

### はじめに

本研究は、国立大学の英語選修学生1名を対象としたオンライン英会話学習の事例報告である。文部科学省による「これからの大学教育等の在り方について」(2013)の提言では「少人数での英語指導体制の整備」をすることで英語に触れる機会の充実が検討されている。ベネッセ総合教育研究所「中高生の英語学習に関する実態調査2014(全国6294名の中高校生対象)」によると、「英語を勉強する上で大切なことは何だと思いますか。」という設問に対し、「英語でたくさん会話をする(中学生53.4%、高校生59.8%)」との回答が最も多かった。また、英語に関する意識調査では、「英語が話せたらカッコいい(中学生88.5%、高校生90.5%)」との結果が出た。安達・牧野(2015)の英語習熟度の低い大学生に行った英語授業についてのインタビュー調査では、「外国の方と話せる勉強や英

---

\*茨城大学教育学部

会話がしたかった」という意見があり、英語を話すことに興味を持っていることが理解できた。このことから生徒や学生は実践的な外国語会話機会の必要性を強く感じていることがわかる。しかし、教師は生徒からの英語での発話における不安の大きさを懸念してスピーキング指導を敬遠し、スピーキングの成功体験を十分に与えていない可能性がある。Horwitz, Horwitz, and Cope(1986)は、リスニングとスピーキングが外国語学習者の覚える不安の大部分を占めており、特に自由会話において不安感が増大すること、不安な状況では能力を発揮しにくいこと等を指摘している。さらに、口頭でのコミュニケーション能力の習得を阻害する理由は不安にあり、それは外国語学習に特有な外国語不安であるとも述べている。自己効力感とは行為者がある結果を生み出すために必要な行動や事態をどの程度効果的に処理できると考えているかという認知であり(Bandura, 1997)、松沼(2006)は、与えられた課題や行動をうまく遂行できるかという自信を意味するとしている。

そこで、できるだけ不安の少ない状況において話す練習を通して、成功体験や自己効力感を高めることを期待して、インターネットを介した共時的コミュニケーションという学習形態に着目した。Clément and Kruidenier(1983)は、外国語不安を接触度という観点からとらえ、目標言語との接触時間が長くなれば不安の減少につながるというモデルを提案している。不安を軽減するために、学習者が達成感を味わう場を得ることが重要である(Matsuda & Goble, 2004)。1対1のビデオ通話を授業に取り入れた日本における研究に、Ryobe(2008)があり、コミュニケーション能力の向上やそれへの強い動機づけとなっていることが示されている。また、スピーキング技能向上と不安軽減に効果的であることを示唆している研究(遠山・森・新谷 2017)も報告されている。個人が目立たない学習には抵抗感がない(北条, 1996)ことや、コンピューターを介したコミュニケーションは、極めて対面に近い環境を実現することができるとされている(Lee, 2007)ことを踏まえ、本研究では、1対1のオンライン英会話の効果を調査する。

本研究におけるオンライン英会話学習とは、インターネットを介したビデオ通話のフリーソフトウェア・スカイプを活用し、一人の外国人講師が一人の生徒を25分指導することである。オンライン英会話に基づく研究は、Long(1996)によって提唱されている相互作用仮説を理論的支柱としている。オンライン英会話において期待される効果は、以下の4つである。1つ目は、対面での会話に近い状況を画面越しに容易に用意できるため、電話でのやり取りとは違い、相手の表情から伝えたい内容を理解しやすい。2つ目は、英語母語話者との1対1の対話が英語で実施されるため、実践的コミュニケーション能力を身につけることができる。3つ目は、その場で即時フィードバックをもらえることができる。4つ目は、スカイプのチャットボックスに文字を入力することができる機能がついているため、講師からのフィードバックを文字情報としても確認することができる。それを活用してスカイプレッスン後の振り返りに役に立つことが期待される。

本研究では、上述の理由により、オンライン英会話学習の取り組みに対してどのような不安を感じるのか、英語で話す事に対する自己効力感がどのように変化するかを検証した。個々の学習者の詳細な心理的变化について深く知ることを目的としているため、この目的に適した質的アプローチを用いる。スピーキング力の向上や動機づけ、不安軽減に効果が示されているオンライン英会話の実践を通じて学習者が何を感じ、英語で話すことに対する意識はどのように変化するかを調べ、その実態に考察を加える。本研究では、英語で話すときに感じる緊張、心配、混乱などの感情のことを不安と定義し、英語を話すことができる確信や自信のことを自己効力感と定義する。

## 研究方法

### 対象者

本研究は、1名の英語専攻の男子学生であり、英語習熟度は高く、TOEICの得点は800点台であった。本研究者は授業を通じてコミュニケーションが取れていたためインタビューでも緊張することなく思っていることを引き出しやすいのではないかと考え、よく知っている学生に協力を依頼した。対象者と実施日時の調整をしたうえで、8回のビデオ通話を授業時間外に本研究者の研究室に来て行った。本研究に対する協力と守秘義務を順守したデータ使用に関して、書面で同意を得た。

ビデオ通話の講師については、毎時間別の英語のネイティブ講師を指定した。これは、直前に予約する制度であるオンライン英会話学習の性質上、8回全て同じ講師を指定することができないことと、同一の講師と繰り返しビデオ通話を行うと、人間関係の構築による慣れや、その他の要因が影響するのを避けるためである。参加者が英語上級者のため、語彙や文法も含め、的確なフィードバックをもらえるように、講師歴3年以上の上級者向けの英語のネイティブ講師に依頼した。講師は、20代～30代の男女で、アメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリス出身であった。

### 実施手順

ビデオ通話の手順を表1に示す。対象者は週に2回、25分間のビデオ通話を本研究者の研究室に来て、1ヶ月間で計8回体験した。タブレット端末を使用して顔が見える状態にし、担当講師が手順通り進行していることが確認できるように、ヘッドフォンは着用せずに参加者と講師の声が両方聞こえる状態で実施した。対象者はビデオ通話開始直前に5、6枚の写真が載せられているワークシート(資料1)を受け取る。Step1のExercise1において1分でそのワークシートの一連の流れが描かれている写真を理解し、話す内容を考える。Step2では、約2.5分間で物語を語る写真描写タスクに取り組む。時間については多少前後しても途中で止めたりすることはなく、できるだけたくさん描写するように伝えた。Step3では、その描写した内容について講師からのフィードバックをもらう。具体的には、全体の感想、文法ミスや、英語表現など明示的フィードバックをもらえるように依頼した。Step4では、それらのフィードバックを参考に、再度同じ写真描写タスクに取り組む。その際、写真1枚ごとに描写を止めて、講師からフィードバックをもらった。こうすることで、新たな修正点などが明らかになり、講師がフィードバックしやすいと考えた。Step5では、別のタスク(資料2)に取り組む。その場で2枚の写真を見ながらその写真に関する講師からの質問に応答し、即興で英語でのやり取りを行う。ここでは質問内容を参考までに載せているが(資料2)、実際のタスクでは、講師からの英語の質問内容はワークシートには記載されていないワークシート(資料3)を活用した。ビデオ通話実施後は話した内容をもとに、Exercise1のフィードバックを参考にして、Exercise1の物語を150～200語程度の英文レポートを書き、次回のレッスン時に提出する、という一連の学習サイクルを設定した。

本研究に用いられた教材は、DMM英会話事業部(2018)により提供された。この教材を選定した理由は、一連の流れがある写真描写を扱っている点と、写真を題材に英問英答でのやり取りができる教材で構成されている点である。全レッスン共通のスピーキングタスクを明確化しておくことで、タスクの違いによる心理的負担やその他の影響をできるだけ少なくした。

表1 即興型によるビデオ通話の実践手順 (N=1)

Warm Up	スカイプの流れ step1 から step4 までを説明	1分
Step1	Exercise1 : 5,6 枚の写真を見て即興で物語を考える	1分
Step2	Exercise1 : 5,6 枚の写真を見て即興で物語を伝える	2.5分
Step3	講師からのフィードバック	1.5分
Step4	1枚ずつ写真を見ながら再度即興で描写、講師からのフィードバック	10分
Step5	Exercise2:2枚の写真について講師の先生からの質問に即興で答える	9分
家庭学習	自宅での振り返りとして、話した内容を書く	30分以内

#### データ収集

ビデオ通話体験後直後に15分から30分の1対1の半構造化インタビューを行った。研究目的に関連のあることを対象者に語ってもらう必要があるためインタビューは半構造化の方法で行い、その内容は対象者の理解を得てICレコーダーに録音した。

インタビューの主な質問項目は以下の通りである。

- 1) ビデオ通話の感想について
- 2) 理解できなかったことについて
- 3) ビデオ通話レッスンのタスクについて
- 4) スピーキング不安について
- 5) フィードバックについて
- 6) 自身のスピーキング力やリスニング力について
- 7) 達成できたことやできなかったことについて
- 8) 次回に向けての改善点についての8項目とし、意識の変化を調査した。

#### データ分析

半構造化インタビューの録音データを逐語化したデータを繰り返し読み、オンライン英会話学習の取り組みが、スピーキングに対する不安や自己効力感にどのような変化が生じるかを明らかにすることを分析テーマとした。逐語化したデータの記述の中で、話す事に対する意識や態度に関して述べられていたものを抜粋し、まずデータを意味のかたまりごとに切片化し、その意味のかたまりを説明できる名前を付けてコード化した。

### 結果

表2にインタビューからのコード化の例を示す。表2は、逐語化データから不安を感じる要因に関して述べられていたものを抜粋し、切片化データしたものを不安要因としてカテゴリー化した。

表 2:不安要因

逐語化データ	切片化データ
<p>1回目:あまり話せなかったです。相手の話すスピードが速くて、ゆっくり言って、とかなかなか気持ち的に言えませんでした。もともとネイティブのような英語を完全に話せる人と話すのは緊張します。スカイプだとジェスチャーやフェイシャルエクスプレッションをだしづらいので、より伝わらないのかなと思いました。現実で対面するより表情の変化・ジェスチャーなどが使いづらいことから、より緊張を感じました。</p> <p>3回目:不安さは、電話がくる直前と言いたい表現や言い換えも思いつかなかったときによくあらわれます。</p> <p>4回目:ただ今回はお相手の先生に笑顔が少なかったため、時々自分の話していることが正しいのか不安になりました。</p> <p>5回目:一度だけ、各写真の描写で言いたいことがわからず、はじめからやり直してしまった時は今までのスカイプで一番焦りをなぜか感じました。知っていても思い出すのに時間がかかる単語がもどかしく、焦りを感じました。</p> <p>7回目:電波が悪く、声が聞き取りづらいこともあるが、それよりも相手のイギリス発音が顕著だったことが関係していると思います。慣れが足りなかったようです。基本的にほめる量は少なめだったように思います。それも少し不安要素になっていたかもしれません。</p>	<p>1回目:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・相手の話すスピードの速さ</li> <li>・英語のネイティブスピーカー</li> <li>・ジェスチャーや表情の伝わりにくさ</li> </ul> <p>3回目:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ビデオ通話応答時</li> <li>・言いたい表現や言い換え表現が思いつかなかった時</li> </ul> <p>4回目:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・笑顔の少なさ（講師の雰囲気）</li> <li>・講師の薄い反応</li> </ul> <p>5回目:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・言いたいことがわからず、初めからやり直した時</li> <li>・単語の意味を知っていても、使うとなると時間がかかり焦る</li> </ul> <p>7回目:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・電波が悪いことによる声の聞き取りづらさ</li> <li>・講師のイギリス英語の発音への不慣れ</li> <li>・ほめる量の少なさ</li> </ul>

最初は、ビデオ通話に慣れておらず、音声の聞き取りにくさも影響し、緊張して講師にもう一度より明確に言うてもらうことを要求する明確化要求ができていないことが見て取れる。また、言いたいことが英語で言えない状況や、講師からの誉め言葉や笑顔等のリアクションが少ない時に、不安を感じるようになった。

表 3:不安軽減理由

逐語化データ	切片化データ
<p>2回目:まだカメラを見るか画面を見るかなど、おろおろする部分はあるのですが、通話自体に対する不安は、前よりも軽減されていました。その理由に、ビデオ通話のイメージがしっかりとしていたことです。実際に話すよりも伝わりづらいこと、だからこそ質問もより気兼ねなくできること、などが理解できていたため、不安が軽減されていました。また、先生の雰囲気が話しやすいものだったことです。ふくよかな見た目と、ほめ言葉を多くする性格などが影響していたのかもしれませんが。</p> <p>6回目:不安はそこまで感じない回だったように思います。前回までに増えたボキャブラリが上手く当てはまる場面が多かったです。あとは感覚的にはありますが、男の先生の方が話しやすい気がします。</p> <p>8回目:不安が下がっている。慣れたんだと思う。伝わっているんだとわかったから。これまでは伝わっている経験をしてこなかったので、成功体験が大事。褒めてくれた。</p>	<p>2回目:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ビデオ通話のイメージをもつ</li> <li>・ビデオ通話の特徴の理解</li> <li>・優しそうな講師の雰囲気</li> <li>・ほめ言葉</li> </ul> <p>6回目:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習した語彙の活用</li> <li>・同性(男性)</li> </ul> <p>8回目:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・慣れ</li> <li>・伝わっていることがわかる</li> <li>・成功体験</li> <li>・ほめ言葉</li> </ul>

表 3 は、逐語化データから不安を軽減する理由に関して述べられていたものを抜粋し、切片化データしたものを不安軽減理由としてカテゴリー化した。類似のタスクを繰り返したことも影響し、ビデオ通話の特徴を理解し、動画による会話に慣れていることがわかる。また、これまで学習してきた英語表現を意識してアウトプットした結果、相手に通じることを実際に経験できたことによる成功体験が不安の軽減理由として明らかになった。

表 4: 不安の推移

逐語化データ	切片化データ
<p>2回目:まだカメラを見るか画面を見るかなど、おろおろする部分はあるのですが、通話自体に対する不安は、前よりも軽減されていました。</p>	<p>2回目: ・前回よりも軽減</p>
<p>3回目:不安さは、電話がくる直前と言いたい表現や言い換えも思いつかなかったときによくあらわれます。しかしながら、回数を重ねることでその頻度は下がったように思います。</p>	<p>3回目: ・回数を重ねるごとに軽減</p>
<p>4回目:電話に対する不安は直前もなくなってきたように思います。ただ今回はお相手の先生に笑顔が少なかったため、時々自分の話していることが正しいのか不安になりました。</p>	<p>4回目: ・電話がかかってくる直前の不安もなし</p>
<p>6回目:不安はそこまで感じない回だったように思います。</p>	<p>6回目: ・不安はそこまで感じなかった</p>
<p>7回目:自分のできたことと自己評価が良かったことに反して、緊張や不安は少しあったように思います。</p>	<p>7回目: ・緊張や不安は少しあった</p>
<p>8回目:不安は今までで一番少ないものだったように思います。</p>	<p>8回目: ・不安は今までで一番少ない</p>

表 4 は、逐語化データから不安の意識の変化に関して述べられていたものを抜粋し、切片化データしたものから不安の推移としてカテゴリー化した。2 回目以降、ビデオ通話に対する心理的变化が生じ、不安が軽減され始めていることが見て取れる。しかし、表 2 の不安要因から、7 回目には講師のイギリス発音や、誉め言葉が少ないことが影響し、少し不安を感じたようである。しかし、最終的には不安をあまり感じなくなっており、短期間でも心理的变化があることが示された。

表 5,表 6 については、逐語化データから不成功体験や否定的な感情から、自信や成功体験など肯定的な感情や態度に関して述べられていたものを抜粋し、切片化データしたものを自己効力感としてカテゴリー化した。最初はできなかったと感じていることが多かったが、繰り返していくうちに、達成感を感じ、自信をつけていることがわかる。6 回目以降のビデオ通話では、講師のフィードバックを生かす場面や、理解度確認や明確化要求の場面も見られ、主体的に話す様子が見て取れる。

表 5: 自己効力感

逐語化データ	切片化データ
<p>1回目:あまり話せなかったです。話していることの全てを理解することはできませんでした。相手の話すスピードが速いので、<b>Could you say it slowly?</b>などなかなか言えません。まだ自然というにはほど遠いなと感じます。アドバイスをすぐに次の練習で活かすことはできました。</p> <p>2回目:指摘されたように、ポーズが入ってしまう部分が不自然と思います。流暢に見えるように話すこともできませんでした。改善点は、ポーズが入ってしまったときに、取り敢えず <b>um...</b>など言葉を発し、場をつなぐようにすることですかね。先日覚えた表現・流れを使い、写真の説明から予想できることを話す決めていたため、前よりはスムーズに話せたように感じます。</p> <p>3回目:できなかったことは、相手の話を遮るような気持ちで、聞きたいことを尋ねることです。つまる部分もやはりあるが、話すこと・自分の知識さえははっきりしていれば多い文量である程度の速度を保ちながらスピーキングをすることができました。日常会話表現を、レッスンの合間に多く入れることができたように思います。英語表現みたいなものが実際の課題でやっている部分以外にも使えたような気がします。これまでは聞かれたことに対して <b>yes.</b> だけだったのが、今回は <b>I got it.</b> など反応できた気がします。言いたいことが言えないときは、つなぎ言葉や言い換えるなど、別のことを話すなどで、対応しました。</p> <p>4回目:スピーキングの際に、簡潔な表現は良く出てくるようになったと思います。はっきり説明することができました、特に要素の多い写真は自信を持って発表ができました。</p>	<p>1回目:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・あまり話せない</li> <li>・全部は理解できない</li> <li>・依頼表現を言えない</li> <li>・自然に話すことはできない</li> <li>・フィードバックをすぐにその場で活かした</li> </ul> <p>2回目:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・話す時にポーズが長く不自然</li> <li>・流暢に話せない</li> <li>・つなぎ言葉を使えない</li> <li>・流れを理解した</li> <li>・前回よりはスムーズに話せた</li> </ul> <p>3回目:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・相手に質問することができない</li> <li>・ある程度の速度で話す事ができた</li> <li>・日常会話などの英語表現を多く使用できた</li> <li>・応答表現が増えた</li> <li>・つなぎ言葉や言い換え表現が使えた</li> <li>・別のことを話すなどして対応できた</li> </ul> <p>4回目:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・簡潔な表現は言えるようになった</li> <li>・自信をもって説明、話をする事ができた</li> </ul>



表 6: 自己効力感について

逐語化データ	切片化データ
<p>5回目:合間で考えてしまい、不自然な間が生まれてしまっている箇所がいくつかありました。写真の説明で、できる限り多くの文を言う事ができなくて、話を切ってしまうように感じます。前回まで蓄えた語彙をしっかり使うことができたと思います。</p> <p>6回目:単語が日本語でしか出てこないときに、テンポが悪くなる部分がまた見られ、質問に即答できませんでした。語彙の引き出しを素早く開けることが課題です。二度目のディスクリビングで、フィードバックを活かしながら意識せずとめどなく話を続けることができました。写真の説明に関しては、なかなか上手くいきました。if you don't mind/ Would you ~? / Could you ~? など、講師の先生に質問やお願いをする表現や Am I correct? などナチュラルに使用できました。</p> <p>7回目:It's difficult. Can I have a moment to think? などの表現を使って時間稼ぎはできたものの、すらすらと次の話題に話せるようになれば良いと思います。質問や相手への反応に関しては、上手く話せていたように思います。話している時に文法ミスに気づき、言い直しができました。もとかから持っていた知識を少し離れたトピックに関する質問に応用できました。</p> <p>8回目:自然な会話もでき、相手のことについてほめるなどもできたのが良かったです。様々な表現を色々な場面で使うことができました。先生の例を参考に自分の話したい表現を使い、日常会話では基本的な英会話表現を多く使うことができました。</p>	<p>5回目:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・不自然なポーズがいくつかあった</li> <li>・複文で話すことができない</li> <li>・学習した語彙を活用できた</li> </ul> <p>6回目:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語でしか単語が出てこなかった時に、話すスピードが落ちた</li> <li>・質問に即答できなかった</li> <li>・フィードバックを活かしてスムーズに話げた</li> <li>・写真描写は上手にできた</li> <li>・質問や依頼表現を自然に使えた</li> </ul> <p>7回目:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーションストラテジーを活用できた</li> <li>・すらすらと次の話題について話せるようになりたい</li> <li>・相手の質問にすぐに反応し、うまく話すことができた</li> <li>・話の途中で文法ミスに気づき、言い直すことができた</li> <li>・背景知識を活用して話す事ができた</li> </ul> <p>8回目:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自然に会話することができた</li> <li>・講師の内容についてもほめることができた</li> <li>・様々な表現を色々な場面で使用できた</li> <li>・自分が話したいことや基本的な会話表現を多く使用できた</li> </ul>

## 考察

最終的に不安要因、不安軽減理由、不安の推移、自己効力感の4つのカテゴリーが生成された。自己効力感については、ビデオ通話の最初の段階では否定的な意見が多く見受けられたが、回数を重ねるごとに肯定的な意見が現れたため、2つに分けて図1に図式化した。カテゴリー化によって、オンライン英会話学習の取り組みが、スピーキングに対する不安や意識にどのような変化が生じるか、に関連する点がいくつか浮き彫りとなった。

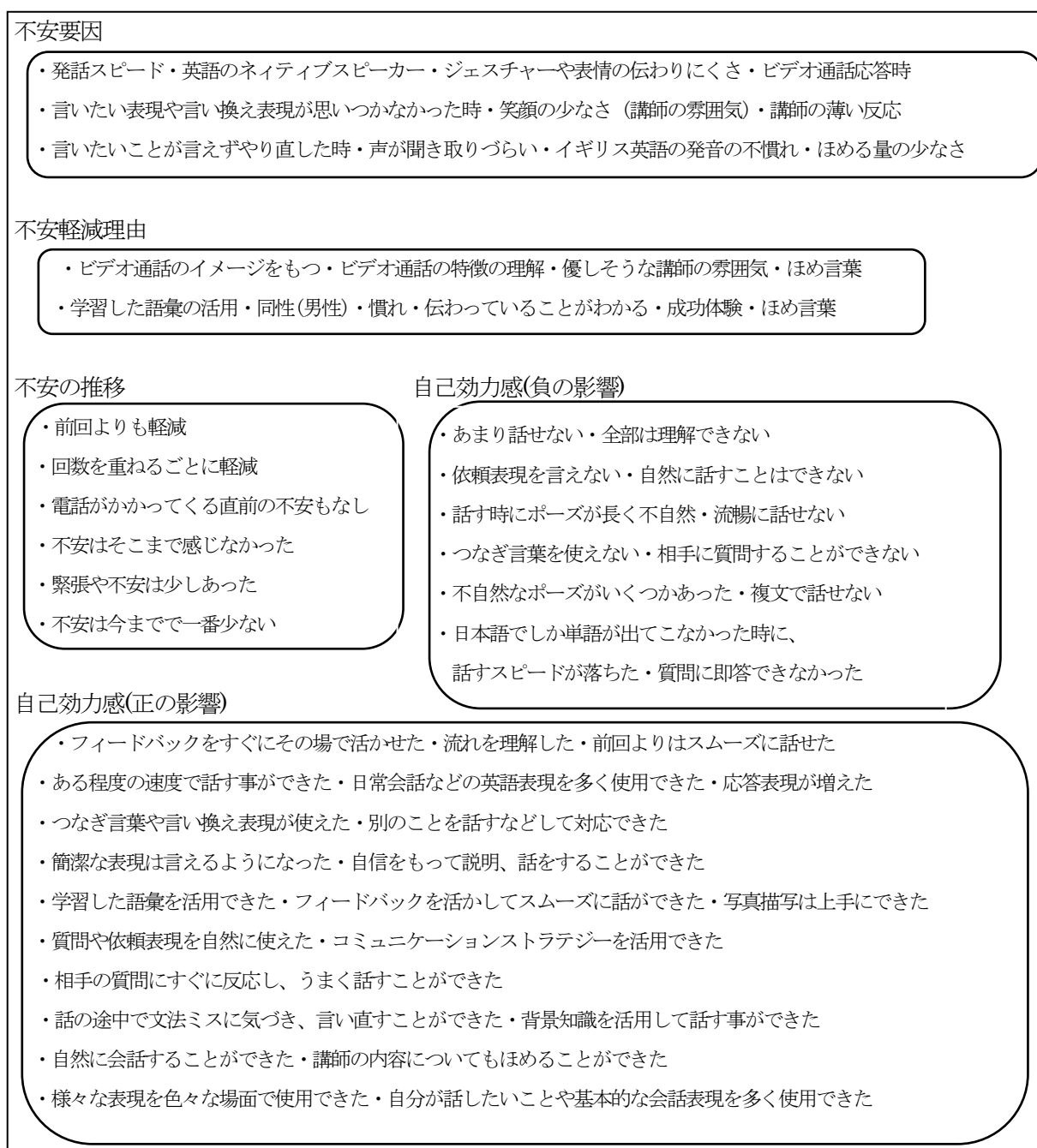


図1: オンライン英会話学習を通じた学習者の心理的变化

上記の結果を踏まえ、オンライン英会話学習の取り組みが、スピーキングに対する不安や自己効力感にどのような変化が生じるか、を考えてみたい。

最初は、話し相手が英語のネイティブスピーカーであることで、話すスピードが速く、自分が話している英語が完ぺきではないため、相手に伝わらないことに不安を感じていた。また、ビデオ通話は実際の会話と比べ、ジェスチャーや表情を伝えることが難しく、声も聞き取りづらいことなども不安の原因として明らかになった。しかし、表2の不安軽減理由や、表3の不安の推移の結果から、オンライン英会話学習を経験するにつれて次第に不安が軽減されていることが読み取れた。たった8回の経験だけでも不安が下がっていることは、ビデオ通話の特徴を理解し、実際にネイティブスピーカーと会話する経験を積むことで、即興で発話することに慣れたことが関係していると思われる。これは、外国語不安を接触度という観点からとらえ、目標言語との接触時間が長くなれば不安の減少につながるというモデルを提案している(Clement & Kruidenier, 1983)の結果と一致している。さらに、講師に自分の英語をほめてもらえたことで、自分の英語が伝わっていることを実感し、このような成功経験が不安の軽減に役立ったと考えられる。これは、外国語学習における不安を軽減するために、学習者が達成感を味わう場を得ることが重要である(Matsuda & Goble, 2004)の結果と一致している。

英語技能に対する自己効力感については、内容と推移に着目する。最初の2回は、あまり言いたいことが言えず、自然に話すことができないといったように自己効力感が低いことがわかる。初回では、“Could you say it slowly?”などの明確化要求はあまり行われておらず、講師の先生からのインプットを受け身で聞いている様子であった。しかし、3回目以降は順調に改善され、つなぎ言葉や会話表現などある程度スムーズに話す事ができるように変化していることが示された。例えば、言いたいことが言えないときに、言い換えることができたという記述からは、自分の意思が相手に伝わっていないと感じられ、意思が伝わるように言い換えるなどの意味交渉が観察された。不安の軽減や講師からのフィードバックをもとにした成功体験が自己効力感を高め、主体的に話す意欲につながっている可能性が示唆された。4回目では、自信をもって説明、話をする事ができたと述べられており、5回目では、これまでに学習した語彙やフィードバックを活かして話す事ができており、学んだ内容の再使用や講師からのさらなるインプットがアウトプットに正の効果があったと考えられる。6回目では、これまで受け身であり、なかなかためらってできなかった質問を投げかけたり、繰り返しの要求をしたり、自ら進んで会話をする態度などの変化が観察され、話す事にポジティブな態度に大きく変化していることがわかる。“If you don't mind ~ / Would you ~? / Could you ~?”など、相手にもう一度より明確に言ってもらうことを要求する明確化要求や、“Am I correct?”など自分の理解が正しいかどうかを確認する理解度確認などのアウトプットを相手の講師の先生に返す様子が確認された。7回目では、“It's difficult. Can I have a moment to think?”などの表現を使って、時間を稼ぎ、沈黙するだけでなく、コミュニケーションをできるだけ自然に行おうとする姿勢が見られた。また、自分の発話の間違いに気づいたときにはそれを修正しながら、話をする事などもできていた。最後の回では、最初の回では自然に話すことができないと感じていたことが、自然に話すことができた自信をもって言えていた。さらに、相手の講師の英語表現やフィードバックに対して、自分の感想や意見を付け加えて話すこともできていた。このように回数を重ねるたびに、顕著に自己効力感を改善する可能性が示唆された。

## 結論

本研究では、ケース・スタディの方法を用いてオンライン英会話学習における心理的变化を記録し、学習者がどのようにして不安を軽減し、自己効力感を高めていくのか、それがどのような結果につながるのかを記述することにより、英語で話すことに対する意識や態度の変容に大きな役割を果たしたものについて考えた。教育的示唆として、本実践では、スピーキングにおける不安を軽減するためには、短時間で少ない回数であっても実際にオンライン英会話を体験して即興的に英語で話す事に慣れる必要性や、回数を重ねるごとに体感できる自己効力感の改善が重要な鍵となることが示された。即興で話すことに対する不安は、経験や練習量が足りていないことによる場合も多い。即興で英語を発信する機会が少ないと言われている教育現場において、ビデオ通話を活用することで、より大きな教育的効果を上げることが期待される。自分の持っている知識を最大限に活用し、なんとかして相手に理解されうる英語で伝えようとする努力や、言いたいことが言えない時でも、講師がうまく引き出してくれることで、中間言語の発達が促されたと考えられる。本実践の対象者が適切なフィードバックを受けた経験、さらに誉め言葉による成功体験によって不安を軽減させ、自己効力感を高めていったと考えられる。実際にビデオ通話を用いて、心理的变化の実証を詳細に試みる研究は少ないため、本研究の意義は大きいものと考えられる。

限界と今後の研究への期待として、本研究はわずか英語上級者1名を対象とした質的研究であり、その結果を一般化することはできないという限界がある。また、対象群の参加者を設けていないため、複数のタスクを含む一連のタスクの繰り返しによる効果も変数としてあり、オンライン英会話学習のみの効果とは言えないため、検討すべき課題は多い。さらに、ビデオ通話の実践において英語で話すことに対する意識はどのように変化するのかの検証のみで、実際の英語での発話例の検証やスピーキング力の向上を測っていない点も限界である。そのため本研究で得られた結論は、もともとの英語力が活性化された可能性もある。今後、英語習熟度が高い学習者だけでなく、低い学習者など多様な学習集団を対象にした場合の有益性も確かめる必要がある。また、ビデオ通話における英語の講師を毎時間固定することがオンライン英会話学習の性質上難しいため、講師のフィードバックの質や量が影響している可能性が考えられる。参加者の実際の発話のやり取りや発話量、質の変化を分析し、どのようなフィードバックやインタラクションがスピーキング不安やスピーキング力の向上に寄与するのかを明らかにしたい。

しかしながら、このような限界はあるものの、日本のような外国語による対話の機会が得にくいEFL環境において、1ヶ月で8回という短期間におけるビデオ通話の実践にもかかわらず、スピーキングに対する不安の減少や自己効力感の向上が見られたことは示唆に富む結果であったと言える。

## 謝辞

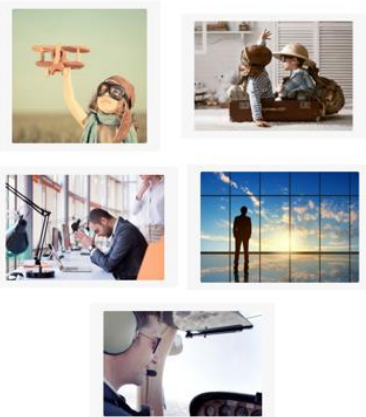
本研究の実施に当たり、宮坂岳史様(合同会社 DMM.com)には多大なご協力をいただきました。本実践はJSPS 科研費 19K13257 の助成を受けたものです。

## 引用文献

- 安達理恵・牧野眞貴 (2015). 「英語が苦手な学習者の質的・量的原因調査」. 『言語教育エキスパート稿集』 107-108.
- Baundura, A. (1997). “Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change.” *Psychological Review*, 84, 191-215.
- ベネッセ総合教育研究所 (2014). 『中高生の英語学習に関する実態調査 2014』  
[https://berd.benesse.jp/up\\_images/research/Teenagers\\_English\\_learning\\_Survey-2014\\_06.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/research/Teenagers_English_learning_Survey-2014_06.pdf) (2018年12月16日閲覧).
- Clément, R., & Kruidenier, B. G. (1983). “Orientations in second language acquisition: I. The effects of ethnicity, milieu, and target language on their emergence.” *Language Learning*, 33, 279-291.
- DMM 英会話事業部 . (2018). 『英会話社写真描写(上級)』  
[https://app.eikaiwa.dmm.com/lessons/jobs/\\_7tHTk0oEeeTHd0qq07ISg](https://app.eikaiwa.dmm.com/lessons/jobs/_7tHTk0oEeeTHd0qq07ISg) (2018年12月16日閲覧).
- 北条礼子. (1996). 「外国語(英語)学習に対する学生の不安に関する研究(6)」『上越教育大学研究紀要』 第15巻, 2号, 45-506.
- Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. (1986), “Foreign language classroom anxiety.” *The Modern Language Journal*, 70 (2), 125-132.
- Lee, L. (2007). “Fostering second language oral communication through constructivist interaction in desktop videoconferencing.” *Foreign Language Annals*, 40, 635-649.
- Long, M. (1996). “The role of the linguistic environment in second language acquisition.” In W.C. Ritchie & T.K. Bhatia (Eds.), *Handbook of second language acquisition* (pp. 413-468). San Diego, CA: Academic Press.
- Matsuda, S. & Goble, P. (2004). “Anxiety and predictors of performance in the foreign language classroom.” *System*, 32, 21-36.
- 松沼光泰. (2006). 「英語自己効力感(ESE)尺度の作成」. 『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』 14(1), 89-97.
- 文部科学省. 2013. 『参考資料 1-2 これからの大学教育等の在り方について(第三次提言)』  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/004/gijiroku/attach/1338229.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/004/gijiroku/attach/1338229.htm), 2013. (2018年12月16日閲覧).
- Ryobe, I. (2008). “The effects of Skype-based video chats with volunteer Filipino English teachers (II): Discovering the superiority of video chat.” *Proceedings of the WorldCALL 2008 Conference*, 120-123.
- 遠山道子・森一将・新谷真由. (2017). 「オンライン英会話グループ学習を用いたスピーキング技能と心理的要因の改善—英語リメディアル教育への適用に向けて—」『外国語教育メディア学会関東支部研究紀要』 1, 37-59.

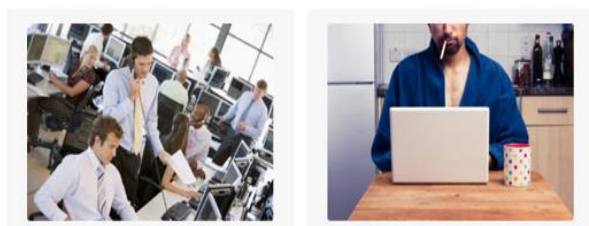
資料

Lesson1<sup>4)</sup>  
 Exercise1: Picture description: You have one minute to prepare.<sup>4)</sup>  
 Create a story based on the pictures. Try to describe people's emotions and thoughts throughout the story. You have two minutes and thirty seconds to narrate the story.<sup>4)</sup>



資料1 Exercise1 ワークシート例

Exercise2: Answer the questions:<sup>4)</sup>



Q1: What jobs do you think these people have?<sup>4)</sup>  
 Q2: How would you say the people in these pictures are different, personality wise?<sup>4)</sup>  
 Q3: What is the social impact of each of the two jobs on a person's life? <sup>4)</sup>  
 Q4: What about the impact on their health and life style?<sup>4)</sup>  
 Q5: What can you say about the productivity and the tendency to procrastinate, regarding these two jobs?<sup>4)</sup>  
 Q6: What can you say about the motivation and stress levels regarding each of the two jobs?<sup>4)</sup>  
 Q7: Overall, what are the advantages and disadvantages of the two jobs? Which one would you choose, and why? <sup>4)</sup>

資料2 Exercise2 ワークシート例

Exercise2: Answer the questions:<sup>4)</sup>



資料3 Exercise2 ワークシート例